A Night Alone:
英語の名詞後位修飾における周辺的事象をめぐる一考察

八木孝夫

1. はじめに

次の一節には、語学的・言語学的観点から見て興味深い表現が含まれれている。斜字体部がその表現である。議論のため、そこを取り出し、(2)とする。

(1) … We had ditched her, left her to the bears and wolves and chortling mountain men. I had been so completely preoccupied with my own savage lust for food and a real bed that I had not paused to consider what our abrupt departure would mean for her—*a night alone among the whispering trees, swaddled in darkness, listening with involuntary keenness for the telltale crack of branch or stick under a heavy foot or paw*. It wasn't something I would wish on anyone. …

(Bryson, Bill (1998) *A Walk in the Woods: Rediscovering America on the Appalachian Trail*, Broadway Books, New York, p. 67.) (以下、引用例中の斜字体はすべて筆者による。)

(2) a night alone among the whispering trees, swaddled in darkness, listening with involuntary keenness for the telltale crack of branch or stick under a heavy foot or paw

(2)において、alone から最後の paw までの部分は、night を後位修飾する表現であるが、少し考えてみると、英語における名詞の後位修飾表現としては大変珍しい特徴を持っていることに気づく。普通は、名詞 N を形容詞句 AP や前置詞句 PP などの表現 XP が後位修飾する場合、XP は[who/which + be 動詞 + XP] で言い換えることができる。実際、初期の変形文法では、[who/which + be 動詞]を削除して、例えば(3)から(4)を出すような規則—Whiz Deletion—が提案されていたことは周知であろう。(以下、記述の便宜上"Whiz Deletion"という用語を用いるが、このような統語規則が存在するかどうかについては本稿では問わない。)

(3)　a boy [who is tall for his age]

(4)　a boy [tall for his age]

しかし、(2)では明らかに、alone の前に which is/was を補うことはできない。一人ぼっちなのは、人であり、夜ではない。このことは特に、listening with …という表現が後ろにあることからも一層はっきりする。 山に棲む獣の気配におびえて、耳をそばだてているのは、一人ぼっちでいるその人であって、夜ではない。

本稿では、(2)のような表現について一定規模の実例調査を行なった結果を報告し、合わせて、この種の表現の存在が、英文法上および文法理論上どのような問題を提起するかについて考えてみたい。

2. 事実関係の調査

2.1. 非 Whiz Deletion 型の後位修飾

(2)の意味を、もし関係節を用いて表すならば、例えば(5)ように言えるであろう。[1]

(5)　a night [during which *x* is alone among the whispering trees, …]

x が何を指すかは、文脈に依ると考えられる。Whiz Deletion(以下「WD」)型の普通の後位修飾表現では、関係節で言い換えた場合、関係節の主語が関係詞となるが、(2)では、(5)で示すように、関係詞は関係節の主語ではない。 このような非 WD 型の修飾表現は、どのような場合に可能なのであろうか。そして、実際に、どの程度使用されているのであろうか。

上の問いに答えるためには、まず、事実調査の対象とすべき構造を定める必要がある。(2)を抽象化して、(6)のように表してみよう。

(6)　[NP… N [[AP…A…] ….]]

(6)において、N は名詞句全体の主要部(head)で、(2)の night に対応する。(6)の A は、(2)の alone に対応する。名詞を後位修飾する表現は AP とは限らないので、(6)を更に抽象化して、(7)のように表してみよう。

(7)　[NP… N [Pred ….]]

"Pred"は、ここでは、述部として機能し得る様々な統語範疇の総称として用いる。 (2)のような非 WD 型の修飾表現はどのような場合に可能なのかという問いは、ひとまず、(7)の N および Pred として非 WD 型ではどのような表現が可能かという問いとして扱い、その点に関する事実調査から始めるのが適切であろう。[2] これは難しい問題であ

り、闇雲に言語資料を調査しても進展は望めない。何らかの考慮に基づき調査の方向付けを行い、候補となる名詞や述語の範囲を徐々に広げて調べて行く必要がある。なお、事実調査は、問題の表現がどのようにして生じて来たのかという、英語の史的変化および言語習得上の問いに対する考察と平行して行なうのが理想であるが、本稿で以下に報告するのは、まだそのような段階に至らない、ごく予備的、限定的な調査の結果である。調査対象としたのは、一億語から成るコーパス BNC (British National Corpus XML Edition)で、検索には付属のソフト Xaira (ver. 1.23)を用いた。

2.2. (2)の類例

BNC で、(7)の N=night、Pred=alone の場合の実例を調べてみると、次の結果を得た。検索対象は"night(s) … alone"の文字列で、night と alone の間に最大３つの単語が入り得るという条件で検索を行なった。検索結果の内、(2)と同じく、alone が night を修飾していると見なせるのは次の２例であった。

(8) The thought of *a cold, uncomfortable night alone on the hillside* did not particularly worry him.

(H9U *Ghost stories: Oxford Bookworms edition*. Border, Rosemary. Oxford: Oxford University Press, 1989.)

(9) After *long days and nights alone* I would wake in the mornings wondering if this new day would bring a new poem from you, a new smile as you ran dancing towards me on your boxer's turned-in toes.

(AC6 *A poet could not but be gay*. Kirkup, James. London: Peter Owen Publishers, 1991)

この内、特に、意味と構造の両方の点から、(2)と同種であることが確実なのは(8)である。(8)の関係する部分の構造を(10)に示す。

(10) The thought [of [a cold, uncomfortable night [alone on the hillside]]] did not particularly worry him.

"a cold … "から"… hillside"までは、of の目的語を成す名詞句で、"alone on the hillside" は night を後位修飾している。[3] 従って、これは、(2)と同種である。

上記の BNC 検索の際に、検索結果の中には、alone が night を修飾しているわけではないが、やはり実質的に(2)と同種と見なせる例が１例含まれていた。

(11) 'Besides, without my castaway life on Gullholm will lose its charm.' Leonora barely heard him, suddenly stricken with dread at the thought of *long night hours ahead alone*. After a pause she said in a stifled voice, 'Must you go back to your room? Couldn't you stay with me tonight? Please?'

(JYC *Out of the storm*. George, Catherine. Richmond, Surrey: Mills & Boon, 1991.)

(11)では、まずaheadがnight hoursを後位修飾し、night hours ahead (「この先の夜の時間」)全体をさらにaloneが後位修飾していると考えられる。なお、(8)と同様、the thought ofに続く名詞句内で問題の表現が生じていることには(cf. (19))、外的生起環境という点から留意しておきたい。

ここまでで一つ言えることは、(2)のような例は非常に珍しいと思われるが、それは、たまたま筆が滑ったとか、意図的な破格の表現ではなく、英文法、言語学の研究対象として有意義な例であると結論して良いということである。これまで見てきた例はすべて、出版された書物からの例であり、英語の母語話者がこれらの文を読んだときに不自然に感じるということは考えにくい。無論、この種の例をすべての母語話者が容認するかどうかは確認しようのないことであるが、少なくとも、この種の表現が文法的である人は、相当高い割合を占めると考えてよいと思われる。

2.3. 非 WD 型後位修飾における被修飾名詞

次の段階の調査対象として考えられるのは、(7)の N としてどのような名詞が現れ得るかという点である。まずは、(7)においてPredをaloneに固定して、その時にNとして現れる名詞の実例調査から始めるのが適切であろう。その場合の第一歩としては、更に、Nの種類を絞り込む必要がある。 "night"の意味を考えると、とりあえずは、何らかの時の区分を表す名詞を対象とするのが適当と思われる。このことは、上の(9)や(11)のように、days や hours が被修飾語となっている例があることからも示唆されよう。BNC で、(7)のN=week(s)/month(s)/year(s)の場合を調べると、(2)と同種と見なし得る例として以下の結果を得た。なお、検索条件で、当該のNとaloneの間に入り得る語数は、前節のN=night(s)の場合と同じく最大3として検索した。

N=week(s) の場合。[4]

(12) Given the media's obsession with Diana, it was hardly likely that they would allow the couple the luxury of *a week alone in the snow*. Somebody should have seen the

inevitable scramble coming, but no one did.

(A7H *Charles and Diana*. Junor, Penny. London: Headline Book Publishing plc, 1991.)

N=month(s)の場合。

(13) Joan moved in some indecision between her home and Richard's. At the beginning of 1978, she went with Ronnie to Los Angeles, where he was working with Donovan. Unbeknown to Joan, her husband had contacted Richard with a plea, 'Give me *three months alone with Joan*. Don't contact her, don't telephone her. And if she still wants to go with you after three months, you have my blessing.'

(FNX *Richard Branson: the inside story*. Brown, M. London: Headline Book Publishing plc, 1989.)

N=year(s)の場合。

(14) Wallace was a different animal, who, through a combination of circumstances and personal courage, was thrust into broader horizons. Against Darwin's five years in Beagle, Wallace had spent four years exploring the Amazon basin, followed by *eight years, largely alone, travelling throughout the Indonesian islands expressly seeking a solution to the evolutionary divergence of species*. He collected what was to amount to over 125,000 species of flora and fauna, many of which were entirely new to science.

(FEP *Ring of fire*. Blair, Lorne. London: Bantam (Corgi), 1988.)

(15) The next day I got all my guns ready and I put more wood and young trees around my house. Nobody could see me now. But, after *fifteen years alone on the island*, I was afraid, and I did not leave my cave for three days. In the end, I had to go out to milk my goats.

(FRX *Robinson Crusoe: Oxford Bookworms edition*. Defoe, D and Mowat, Diane. Oxford: Oxford University Press, 1993.)

(16) He was looking across at her. 'I'm surprised that you have never remarried. *Six years alone* is rather a long time.'

(H97 *Miracles can happen*. Howard, Stephanie. Richmond, Surrey: Mills & Boon, 1992.)

上の例のうち、特に(14)の例には注意しておきたい。問題の修飾関係が非制限的という点を除けば、(2)と極めてよく似た例である。"travelling ...", "seeking ..."の意味上の主語は largely alone の意味上の主語と同じであり、travel するのは人なので、(2)の場合と同様、alone と years の関係が WD 型ではないことがはっきりする。[5]

以上の結果からは、一般に、時の区分を表す名詞は alone によって後位修飾され得るということが推察される。次の段階の調査としては、期間または時点を表す前置詞(during/at など)の目的語として生じ得る名詞で、それ自体は直接的な時間表現ではない種類の名詞(例えば、journey や arrival)と alone などとの共起関係であろう。この点を含めて、非 WD 型に生じ得る名詞の種類がどこまで拡大するかについては、今後の調査の課題としたい。

2.4. 非 WD 型後位修飾における修飾表現

次に、(7)(下に再掲)の Pred に注目してみよう。

(7) [NP... N [Pred ....]]

非WD型の後位修飾で、Pred として alone 以外にはどのような述語が可能であろうか。この問いに関する調査では、今度は、まずNに当たる名詞の種類を固定する必要があるが、その点に関しては、前節の結果を考慮すれば、N が時の区分を表す名詞である場合から始めるのが適当であろう。そして、N についての調査の場合と同様に、Pred に関しては、まず、alone の意味上の類語から調べるのが適当であろう。

但し、ここで一つ注意せねばならないことがある。alone に意味が非常に近い lonely を例にとると、(17)の斜字体部が示すように、lonely は人以外を主語に取ることができる。

(17) Many are already eagerly making plans to return home. But for one Chilean exile, Andres Valenzuela, *Thursday will be much like any other day -- long, boring and lonely*. It will pass in a succession of aimless walks and endless glasses of beer in the picturesque little French town where he has sought refuge.
(A91 [*Guardian, electronic edition of 19891207*]. London: Guardian Newspapers Ltd, 1989.)

従って、lonely による、一見(2)と似た名詞の後位修飾の例があっても、それは、WD 型と見なすことが可能であり、(2)や(14)のような、WD 型と明らかに矛盾する特徴を

持った例が見つからない限り、本稿で問題としている表現であると断定することはできないことになる。alone の類義語には、lonely と同様の性質を持った語が多いように思われ(そして、そのこと自体が、後位修飾における alone の振る舞いに影響を与えている可能性もあるかも知れない)、Pred の意味範囲をある程度広げたところから調査を始めないと、非 WD 型の発見は難しいかも知れない。

意味上 alone に関係があり、上で(17)に関連して述べた懸念がないと思われるのは、反意語の together である。BNC では、together が night を後位修飾している例は数多く見つかり、それがごく普通の表現であることが分かる。ここでは２例のみ挙げる。

(18) Rachel, this is *our last night together.*

(H8M *Underground.* James, Russell. London: Victor Gollancz Ltd, 1989.)

(19) The memory of *their night together* haunted her so relentlessly that it was daylight before she fell into an uneasy, exhausted sleep.

(JYC *Out of the storm.* George, Catherine. Richmond, Surrey: Mills & Boon, 1991.)

alone, together 以外にどのような述語が問題の後位修飾を許すかについては、今後の課題としたい。

3. 検討すべき課題

今後考えるべき幾つかの課題について、ここで簡単に触れておきたい。

A. 第一の課題は、当然ながら、問題となっている現象を、文法のどのような規則で表せば良いかという問題である。統語的な構造の問題については下で触れるが、もう一つの問題は、意味解釈の仕組みである。通常の名詞修飾の場合と共通した問題として、構造に言及した特定の解釈規則を立てるべきか、それとも関数適用(functional application)で扱うべきか—あるいは、更には、両者の違いは単なる表記上の違い(notational variant)に過ぎないのか—という問題がある。すなわち、Predicate Modification のような、名詞と修飾表現から成る特定の構造に言及した解釈規則で扱うべきか、それとも、関係する語彙項目の意味を新たに規定して通常の関数適用で扱うべきかという問題である(Heim and Kratzer (1998: 65ff.)参照)。いずれの方法をとっても、この問題に本格的に答えるためには、前章で扱った、記述レベルでの事象の解明が進む必要がある。

B. (2)のような表現が投げかける最も重要な言語学上の問いは、言語習得との関わりであろう。このような表現は、言語習得上のどのような仕組みによって生まれて来るのであろうか。この問題について考えるためには、少なくとも、名詞の後位修飾表現の全体について見渡して、その中での各表現間の相対的関係を考えることが重要となろう。名詞の後位修飾には様々な種類と制約があり、[6] その体系全体に照らして考えることによって初めて、(2)のような表現の存在価値とその出現の仕組みが見えて来る可能性がある。

名詞の後位修飾で最も基本的なのは、(20)のような前置詞句による修飾で、意味的にWD型のものであろう。

(20) a book on the desk ('a book which is on the desk')

形容詞(句)による後位修飾は、頻用されるという点では基本的であるが、普通は形容詞単独では不可であるなど、いろいろな制約があり、その意味では周辺的な側面を持っている。

(21) a *They have a house (much) larger. (Quirk et al. (1985: 420))

b. They have a house (much) larger than mine.

分詞表現による修飾は、(22b)で示すように、関係詞+be動詞を補えない場合があり、その場合はWD型ではない。しかし、関係節でパラフレーズした場合、関係詞が関係節の主語として働いているという点では、WD型の基本的な性質を有する(22c)。従って、(22a)のような分詞表現による修飾は準WD型と言えよう。

(22) a. someone *knowing the answer*

b. *someone who is knowing the answer

c. someone who knows the answer

非WD型の後位修飾表現は、(2)のようなものばかりではない。(23)のような、ごくありふれた、その意味では基本的と言っていい表現で、非WD型のものも存在するという点は重要と思われる。

(23) a. the message yesterday

b. a letter last August

この種の表現では、修飾内容の具体的な解釈は、名詞の意味と文脈に依存して語用論的に決まるる度合いが高いと思われる。

上の(23)の類と直感的にはよく似ていて、しかも、(2)との関連性が深いと思われる

のは、(24, 25)の斜字体部のような表現である。この種の表現は、しかし、WD 型なのか非 WD 型なのか、どちらと判断すべきか微妙である。対応する"N+be 動詞+Pred"型の文が必ずしも不可能なわけではないので、非 WD 型と断定はできないが、一方、その種の文はかなり稀なので、WD 型と見なすことにも不自然さがある。

(24) The course is of three years' duration. However, for students taking French as a major or joint subject with European Studies, the duration is four years, involving *a year abroad in an appropriate country.*

(B3C *Undergraduate prospectus for entry 1992.* Coleraine: University of Ulster, 1991.)

(25) *Nicholas's experience abroad* enabled him to assist the Company in many ways, such as in starting the cultivation of vines and the silk industry, and in sending out skilled artisans from Germany.

(CFF *Alternative saints.* Symonds, Richard. Basingstoke: Macmillan Publishers Ltd, 1988.)

非 WD 型として扱った場合は、例えば、a year abroad は、

(26) a year during which one is abroad

とパラフレーズできて、year と abroad の間の修飾関係が、(2)における night と alone の間の関係と同種と見なせる点が特に注目される(cf. 注 1)。実際、WEB 上で試みに "year abroad studying" という文字列を検索すると、(27)の斜字体部のような、分詞による修飾を伴う例が多数見つかる。

(27) The $22,000 grant will finance *a year abroad studying the ways in which technology, specifically the electronic drum machine, is used in traditional music.*

果たして、"a night alone" と "a year abroad" が後位修飾に関し全く同質の表現と言えるのか、また、abroad と他の場所表現は全く同じ性質を示すのか、などについては、更なる事実調査を通じて慎重に検討する必要がある。

言語習得の観点から見た場合、このようないろいろな種類の後位修飾表現の間には、どのような関係があるのであろうか。あるタイプの表現 X が存在して初めて、別のタイプの表現 Y が習得可能になる、あるいは、表現 X が表現 Y の出現を容易にする、といった関係がいずれかの表現類の間に存在するであろうか(Kajita (1997)参照)。また、もしそのような関係が存在したら、それは、文法理論での規定を直接的に反映したも

のなのであろうか。あるいは、何らかの文法外の要因で決まる性質のものであろうか(つまり、文法理論では、これらの後位修飾表現が初めからすべて可能という規定になっていても、例えば、表す概念の複雑さのような文法外の要因によって問題の関係が説明できる、といった可能性があるであろうか。) この問いは、直ちに答えが出る性質の問いではないが、後位修飾の問題を、より高次の一般的な問題の視座から眺めるために重要である。

C. 最後に、構造の問題について触れておきたい。先に(5)(下に再掲)において、(2)の後位修飾表現が一つのまとまりを成す構造を提示した。これは、(2)の意味を表すのに関係節を用いてパラフレーズしているので、当然そのようになるのであるが、(2)そのものの構造が、(5)と同様に、後位修飾部がまとまって構成素になっている(28)のような構造かどうかは別問題であり、慎重な検討を要する。

(5) a night [during which *x* is alone among the whispering trees, …]

(28) [a [night [alone among the whispering trees, …]]]

意味と構造の間の単純な対応関係を否定し、「平らな構造(flat structure)」を提唱するCulicover and Jackendoff (2005: 140, 145)に従えば、すべての修飾表現がNPの節点からぶら下がっている次の構造が考えられる。(修飾と構造の関係については、Heim and Kratzer (1998: 82-83)も参照。)

(29) [$_{NP}$ [a] [night] [alone] [among the whispering trees] [swaddled in darkness] [listening with involuntary keenness … a heavy foot or paw]]

あるいは、X-bar理論とbinary branchingの仮説に従えば、(30)のように、修飾部が順に上に積み重なった構造になるはずである。

(30) [$_{NP}$ [a] [[[[night] [alone]] [among the whispering trees]] [swaddled in darkness]] [listening with involuntary keenness … a heavy foot or paw]]]

(28-30)以外にも幾つかの構造が考えられるが、どのような構造が正しいかという問題は、(2)の後位修飾部が分詞表現を含むことを考えれば、to-不定詞や分詞の表現されていない主語を決定する仕組み(control)と密接な関係があると言える。特に、(29)の構造が、概念構造に基づいてcontrolを決定するというCulicover and Jackendoff (2005: Ch. 12)の理論と整合性があるかどうかは興味深い問題である。後位修飾表現の構造の問題については、別の機会により詳しく論じたい。

以上の簡単な考察だけからでも、(2)のような周辺的表現が、文法上の重要な問題を

考える上での有意義な材料となり得るということは明らかであろう。また、当該の事象は、言語における多様性の問題が、しばしば、統語構造と意味を結びつける仕組みに関して生じるということの新たな証左を提供していると言えるであろう。

注

1. 言語分析におけるパラフレーズの利用に関しては、恣意性に対する用心が必要である。(この点については、「あり得ない語」の分析に関する Dowty(1979: 237)の批判的コメントが参考になる。) 例えば、(2)の意味を、(5)ではなく下記(i)のように表すことも考えられる。目下の問題に関して言えば、パラフレーズの仕方により(2)が非WD型であるという結論が左右されることはないが、事実調査をどの方向で進めて行くかや、各種修飾表現間の意味的類似性をどう見るかといった点に関しては、(2)の意味を具体的にどう捉えるかがかなり影響するはずである。

(i) a night [which *x* spends alone among the whispering trees, …]

なお、本稿で問題としている後位修飾における、被修飾名詞と修飾表現の間の意味関係が、(5)や(i)のパラフレーズで示した類の明示的、特定的なものとは限らない点には注意が必要である。字義通りの意味 (literal meaning) として文法で決まる部分は、ごく緩やかな意味関係に過ぎない可能性もある。

2. 言うまでもなく、このことは、(7)のNや Pred 以外の要因—例えば、当該の名詞句の決定詞や外的な生起環境など—が、非WD型後位修飾の可能性に関わっている可能性をあらかじめ排除するものではない。

3. 厳密に言うと、構造的には、前位修飾する形容詞の cold と uncomfortable がどの節点(node)に支配されるかによって、"alone …"が構造的な意味で修飾する構成素は変わってくる。また、"alone on the hillside"が構成素を成すかどうかについても議論の余地がある(3 節参照)。これらの点は、今の段階では議論に影響を与えないので不問とする。以下の引用例に関しても同様である。

4. 検索結果には次の例も含まれるが、該当する例と見なせるかどうかは微妙である。

(i) She took a grip on herself. What did it matter? She had far more important things to think about, like how she was going to survive *the next four weeks alone with a man whose quiet voice and manner hid a ruthlessness and determination that made steel look limp by comparison*. As they walked out on to the street Polly took in a lungful of crisp cool air, savouring her freedom.

(H7W *Bay of rainbows*. James, Dana. Richmond, Surrey: Mills & Boon, 1993.)

下線部全体が構成素をなしている構造ならば、(2)と同種だが、alone 以下が動詞句を修飾している構造ももちろん考えられる。二つの構造に応じた意味の違いはほとんどないので、どちらの構造が意図されているのかは決定し難い。

5. 同じ非 WD 型でも、(2)や(14)と他の例を直ちに同列に扱うのは危険かもしれない。alone による非 WD 型の後位修飾を可とする人は皆、(2)や(14)に見られるような後続する分詞による修飾も可とするのかどうかは興味ある問題である。

6. Quirk et al. (1985: 420, 1292ff.)参照。さらに、"a box this size"や"a man of great importance"などの後位修飾表現については、八木(1987: 35-36)、Amanuma (2003)及びそれらに挙げられている文献を参照。

引用文献

Amanuma, Minoru (2003) "Descriptive *Of*-Phrases in English: Toward an Analysis from a Developmental Viewpoint," *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, ed. by S. Chiba et al., 54-69, Kaitakusha.

Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press.

Dowty, David R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*, D. Reidel.

Heim, Irene and Angelika Kratzer (1998) *Semantics in Generative Grammar*, Blackwell.

Kajita, Masaru (1997) "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language," *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, ed. by M. Ukaji et al., 378-393, Taishukan.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.

八木孝夫 (1987) 『程度表現と比較構造』(新英文法選書 第7巻) 大修館書店.